

〈研究・教育の周辺〉

古い旅行案内に見る長崎

谷澤 毅*

この年末から年始にかけて、旅行の歴史に関する文献に何冊か目を通す機会を得た。両大戦間期の豪華客船の歴史と、同じ頃の長崎の観光の歴史について調べる必要があったからで、このうち豪華客船の歴史については、本誌掲載の山本裕国際経営学科教授が研究代表を務めたクルーズに関する研究報告のなかに収めることができた（「モダン都市の時代」の贅沢な客船と船旅）。長崎の観光の歴史については、現在執筆中のある長崎の人物を題材とした原稿に成果の一部が生かされる予定である。

さて、旅行の歴史について調べていくに当たり、今回手にした本のなかには筆者が所蔵するある程度古い本も含まれている。これまで購入したこともすっかり忘れていた昔の旅行案内書であり、いずれも学生時代に古本屋巡りをしながら集めた雑多な本の一部をなす。古い順にタイトルだけでも紹介すれば以下の通りとなる。鉄道省編『鉄道旅行案内』（大正10年）、鉄道省『お寺まいり』（大正11年）、鉄道省『温泉案内』（昭和6年）、海外旅行案内社『米国旅行案内』（昭和2年）、日本交通公社『外国旅行案内』（昭和31年）、日本交通公社『旅程と費用』（昭和36年）、石田龍次郎・和歌森太郎編『旅窓全書 九州各線 - 産業・史跡・観光』（修道社、昭和36年）。いずれの案内書とも、本文は当時の視点から観光地が紹介されているので観光史

に関する貴重な史料であるし、とくに広告は文面、イラストともに時代を感じさせ、見ているだけでも楽しい。

残念ながら、これらの古い案内書の内容は今回執筆した原稿に活かされることはなかったが、以下ではこのうち一番古い鉄道省編『鉄道旅行案内』（大正10年）を取り上げ、長崎のことがどのように記述されているのか紹介してみたい。ただし、筆者手持ちのこの本は、昭和51（1976）年に中外書房から刊行された復刻版である。紙幅が限られているので、長崎市と佐世保市周辺について見ていこう。

本書は、新書本をさらに細長くした横長のやや厚いとはいえ小冊子ともいえる小振りなもの。鉄道沿線を俯瞰した2ページ見開きのカラーの鳥瞰図と名所を題材とした風景画がたくさん掲載されていて、思わず見とれてしまう。特に鳥瞰図は、「大正の広重」と讃えられた絵師吉田初三郎が活躍した当時をしのばせる、斜め上空からのパノラマである。全310ページであるが、絵図はページ数に含まれていないので、おそらくは400ページを超えるだろう。中身を見ると、まず全体的な鉄道営業案内があり、次いで東京及びその付近、東海道線、山陽線など西日本へと記述が続き、後半は東京から北へと向かい北海道で終わる。今の『時刻表』とほぼ似た記載順となっている。

*長崎県立大学東アジア研究所長、経営学部教授

長崎線に割り当てられているのは、わずか181～188ページ。本書全体がそうであるが、いずれの箇所も解説、紹介はいたって簡潔である。当時、長崎（本）線は早岐・大村を経由する現在の大村線を経由していた。有明海沿いを通る現行のルートは有明線と呼ばれ、昭和9（1934）年にこちらが長崎本線に改称された。

さて、『案内』の長崎線の記述に従って早岐から見ていこう。旧漢字は現行の字に改めている。【早岐】「早岐の瀬戸に望み五島、平戸に至る汽船便あり、佐世保線の分岐点である」。当時は、早岐から離島への船の便があったことがわかる。また、佐世保線の起点も今の肥前山口ではなく早岐であった。【佐世保】「三方を峰巒（らん）に囲まれ、南方に良港を有し、島嶼西辺に横（た）はつて形勢無双の地で、海軍鎮守府を置かれ、今人口八万七千人を有する」。鎮守府設置後、佐世保の人口は急増したものの、第一次世界大戦後の平和の到来とともに人口は減少した。大正9（1920）年の人口は約9万、全国で21番目に多かった。観光地としては、九十九島が「船遊の興はきわめて深い」、伊ノ浦の瀬戸（針生瀬戸）は「大潮の頃は鳴門に劣らぬ壯観を呈する」と紹介されている。旅館は、「池月、油屋、鶴谷、山下」とある。

大村、諫早の簡単な記述、小浜、温泉（雲仙）の詳しい記述は割愛して長崎方面に移る。【大草】「駅付近海上の風光佳く」とある。「名高い伊木力蜜柑」と書かれた伊木力みかんは今も名高い。【道ノ尾】「道ノ尾温泉、東五丁、長崎人士の遊樂地である」。温泉の創業は明治元年、「道ノ尾ラジウム温泉」として親しまれ、戦後はラジウムサイダーの工場もあった（道ノ尾温泉のホームページより）。「旅館古田」とあるのは温泉の発見者古田吉平氏が営んだ旅館のことだろう。

【長崎】「風光の美、気候の温、物価の廉を以て外人に「世界の楽土」と激賞せられている」。「世界の楽土」は少々大げさな気もするが、たしかに明治時代より長崎は多くの外国船が寄港するハイカラな、そしてモダンな港町であった。「今人口十七万六千人を有し、九州第一、本邦第七位の大都市となり」。当時は福岡市より人口が多かったのである。「湾頭の風光は実に愛すべく、夙（つと）に瓊浦（たまのうら）の美称を唱えて居る」。長崎の物産として挙げられているのは、鼈甲細工、珊瑚、真珠、金銀等の細工漆器、洋傘、縫針、石炭、海産物、長崎カステラ。もう一つあるのだが、活字が小さいうえ少し潰れているので判読できない。「○子」とある。

諏訪神社の祭礼、精霊流し（7月15日とされている）、凧揚げが「長崎の三名物」として紹介されている。「境内は今公園となり」とある公園とは、諏訪神社に隣接する長崎公園のことであろうか。そのほか、見どころとしては福濟寺、興福寺、大徳寺、崇福寺、八坂神社が挙げられているだけである。大浦天主堂やオランダ坂、孔子廟はない。グラバー邸は、当時まだ家族が住んでいたはずである。旅館は、「上野屋、福島屋、みどりや、池田屋」とあるだけでホテルはない。長崎最大と言われた長崎ホテルは、この「案内」刊行の少し後、大正13（1924）年に閉鎖される。

記述は、離島を含む長崎県の概要と水産業のデータへと続き、最後は長崎に因んだ詩歌が幾つか紹介されて終わる。なお、本書では距離がまだ哩（マイル）で表記されている。時刻表などの鉄道案内で表記がキロメートルとなるのは昭和5（1930）年からである。